第 164 回 長崎大学ＦＤ実施報告書（平成 30 年 2 月 27 日提出）

１．題　目：外国語教育を考える－学習者中心の観点から

２．日　時：平成 30 年 2 月 17 日（土）13 時 30 分～16 時 30 分

３．場　所：教養教育講義棟 A-13 教室

４．主　催：初習外国語小委員会

５．対　象：教養教育外国語科目（初習外国語）担当教員

６．長崎大学ＦＤに関する指針第二項への該当について【複数選択可】
（該当するものに○を記入すること）
［　○　］(1)　教員の教育活動に関するもの
［　　］(2)　カリキュラムの改善に関するもの
［　○　］(3)　教育の組織的改善に関するもの
［　　］(4)　入学者選抜方法の改善に関するもの
［　○　］(5)　その他教育改善及び入学者選抜の改善に関するもの

７．今回のＦＤの趣旨・意義（６．に関連した形で記述すること）
「語学の授業は元々アクティブラーニングである」という言葉を時々聞く。ただし、教員主導の"Repeat after me" では、学生が本当に「考えて」発話するとも考えにくい。本 FD ではまず、本学の韓国語、フランス語の専任教員が実践してきた活動例を紹介し、FD 参加者の方々に体験して頂くことにした。本学の教育環境に根ざした活動例を紹介することで、本学の教育の組織的改善に直接インパクトを与えることが期待されるからである。また後半では、各言語の授業が置かれた特殊性を鑑み、言語別に別れ、学生の頭をアクティブにし、学習（ラーニング）が起こる授業をテーマに意見交換を行う。

８．プログラム構成［題目・担当講師］（当日使用した資料等を添付すること）
13：30～13：40　挨拶　　稲田言語教育研究センター長
13：40～14：30　「韓国語授業での試み」
言語教育研究センター　劉教授
14：30～15：15　「フランス語授業での試み」
言語教育研究センター　大橋教授
15：30～16：30　言語別分科会
９．参加者：２１名

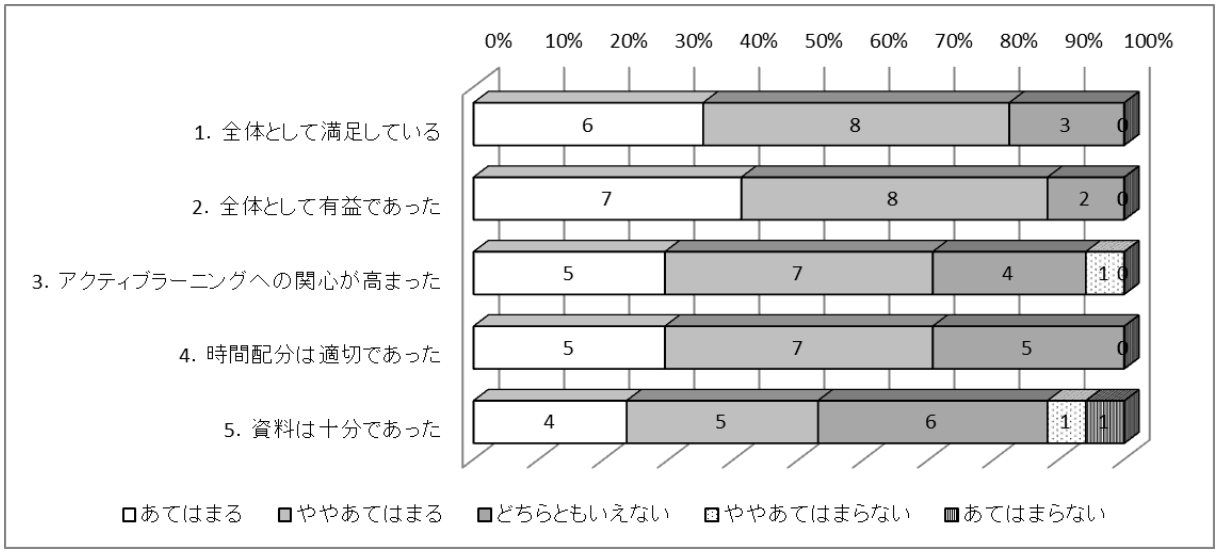
（内訳）

所　属	人　数
言語教育研究センター	4
多文化社会学部	1
経済学部	1
学外非常勤講師	１５
計	２１

※別紙に参加者名簿を添付してください。

１０．実施したＦＤの成果等

（１）参加者からの評価（アンケートの集計結果を記述する）



（回答者：１７名）

●アクティブラーニングに関して、何か感想やご意見がありましたら、ご記入ください。

- 色々なアイディアをご紹介いただき、今後の参考にしたいと思います。
- 最終的にその授業が何を目指しているのかが重要で、アクティブであればよいという話ではない。初習の目的は単にリアルライフの会話が上達することだけではない。
- アクティブラーニングは、今後中国語の教育に取り入れたい。
- 教材との連動についてちょっと説明してほしかったです。
- 毎回の授業では時間的に無理があるようで、内容によって 2、3 回試してみたいと思います。
- 学生のレベルによってしたいです。
- どちらのプレゼンテーションもアクティブラーニングの具体例を体験して知ることができてよかったです。
- 目標の設定によって、効果の評価は変わると思う。

・ アクティブラーニングの事例集の初習外国語版を作ると有義かなと思いました。
・ アクティブラーニングで言語をより身近に体験できるという点は、学生にとって有益な勉強方法の一つとして捉えることができると思います。
・ コミュニケーションでコミュニケーションを学ぶ、real life に沿う必要はその通りだと感じています。しかし現実には外国語の授業以前の「母語」における「自身のリアル」なコミュニケーションに壁を持つ世代を相手にしているので、なかなか難しいなと改めて感じます。

●今回のＦＤの運営に関して、何か感想やご意見がありましたら、ご記入下さい。

・ 個々のプレゼンに対して質疑応答の時間をもっと取ってほしい。
・ 今回のような参加型はとても良いと思います。
・ たくさんのことを学ばせていただきました。ありがとうございました。
・ 自分の心の準備がなかったからだと思いますが、グループワークで「何を」「どうすればよいのか」の先生のご説明をすぐに理解できず戸惑いました。

（２）総　括（１０（１）を踏まえＦＤ全体の総括を記述する）

本 FD は、本学の初習外国語の科目目標を理解し、科目目標として掲げている「積極的な学生参加型授業」の推進を促進するために開催された。前半では、本学の韓国語、フランス語の専任教員が実践してきた活動例を紹介し、参加者に体験して頂いた。後半では各言語に別れ、学生参加型授業の実践について意見交換を行った。

参加者からの評価としては、8 割以上の参加者が満足し、全体として有益であったと感じていたことが確認された。また、アクティブラーニングについては、7 割の参加者が関心が高まったと答え、「教育に取り入れたい」「試してみたい」などの肯定的な反応を示した。しかし一方で、「アクティブであればよいという話ではない」、「コミュニケーションに壁を持つ世代を相手にしているので、なかなか難しい」などの懐疑的な反応も見られ、「積極的な学生参加型授業」の推進には課題が残っていることが確認された。　（文責：劉　卿美）

１１．実施代表者の連絡先

部　局：言語教育研究センター
職　名：言語教育研究センター長　　氏　名：稲田　俊明
e-mail：inadat@nagasaki-u.ac.jp　　内　線：2379

１２．申請者の連絡先

部　局：言語教育研究センター
職　名：教授　　氏　名：劉　卿美
e-mail：you-kiss@nagasaki-u.ac.jp　　内　線：2081